特集 関わりの中で生きる
4-6面 報告・YWCAの夏

The Young Women's Christian Association
YWCA
10
OCTOBER 2014
No.722
www.ywca.or.jp

日本YWCAの使命（ミッション）
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

第31総会期主題
平和を実現する人々は幸いである―マタイによる福音書5章9節

日本YWCAビジョン2015
（1）・非核・非暴力により平和を実現する
・平和憲法をまもり、世界に広める
・原発のない社会をつくる
・市民レベルで東北アジアの信頼関係を築く
（2）女性と子どもの権利をまもる
（3）若い女性のリーダーシップを養成する

「自立援助ホーム」を知っていますか

児童福祉の「最後の砦」で子どもたちに寄り添う

被虐、養育放棄、親との離別等、さまざまな理由で家庭からはじき出され、社会的養護を必要とする子どもたちの中に、15、6歳で自立を課せられる子どもたちがいる。2004年に横浜市で2軒目の自立援助ホーム「ふじえホーム（現・ふじホーム）」を開所以来、多くのこのような子どもたちに寄り添ってこられた藤江みどりさん、彰さんにお話を伺った。

（インタビュー・文責：編集部）

自立援助ホームとは

自立援助ホームは、児童福祉の「最後の砦」と言われます。義務教育の年齢を超えた15歳から20歳未満の青少年で、就労しながら自立をめざすことが、ホーム利用上の条件になっています。高校に進学しなかったり、あるいは中退したために児童養護施設を出なくてはならない子ども、低年齢児の入所が優先されるために児童養護施設に入れない子ども、施設を出て住み込み就労をしたが自分から辞めたり解雇されて、住むところも生活の基盤も失った子ども、施設内での問題行動が原因で施設を出ざるを得ない子ども、少年院の仮退院先がなくて出院できない子ども、家裁の審判を受けた子どもなど、どこにも行き場のない子どもたちに残された最後の居場所です。こうした子どもたちと生活を共にしながら、自立を支援するのが自立援助ホームです。その数は、10年前のふじえホーム開設当時には全国22カ所、2014年現在は全国113カ所です（厚生労働省目標は今年度全国160カ所）。自立援助ホームに入居する子どもは、以前は児童養護施設出身者が殆どでしたが、今は虐待を受けた子ども、親の精神疾患や貧困、離婚・再婚の中で居場所を失う子、発達障碍（がい）が原因で養育拒否された子どもも増えています。

「強いられた自立」

自立援助ホームの入居条件は「働きながら自立を目指す」ことです。帰る家庭がなく、他に受け入れる施設がなければ自立援助ホームに入り、それまで通っていた全日制高校を辞めて、定時制・通信制高校に入り直すことを納得せざるを得なくなる子どももいます。「自立します」と言う以外選択肢がなく、生きる場所も方法もないために、そう

言わざるを得ない「強いられた自立」なのです。

自立援助ホームの入居期間は6か月から1年、特別な場合を除いて長くても3年です。癒えていない心の傷や大人への信頼感の喪失によって、対人関係の困難を抱える15、6歳の子どもが、そんな短い期間で自立するのは難しく、しかもたったひとりで生きていくことを望んでいるでしょうか。中には、自由を求めて短期間でホームを出る子もいます。どの子にも、ホームを出た後、いつでも戻っていい場所であることを伝え、また、一人暮らしの最初のアパートはなるべくホームの近くに探し、時々様子を見に行ったり、ホームへ食事に来るよう誘います。社会に出て、対人関係につまづき、さまざまな困難に直面して仕事や住む場所を失くし、孤立無縁の中で取り返しのつかない判断をする一歩手前で、私たちにSOSを発信してもらえるよう、ホームにいる間に関係を築けるかがとても大切です。

子どもたちとの毎日で大切にしていること

子どもたちは食に偏りがある子が目立ちます。ある子どもは唐揚げとポテトしか食べない。育った場所の食の偏りや、お腹一杯好きなものを食べられなかったことも想像できます。ある子は塩むすびしか食べない。それは、たった一人の肉親である祖母が、いつも自分のために塩むすびを握ってくれたという大切な思い出からでした。食の場面でさえ、事柄の表面だけではわからない、子どもたちの奥深い想いに触れることがあります。ホームの生活の中で、食事はとても大切な時間です。好き嫌いにも柔軟に対応し、多少のわがままも聞くようにしています。自分のためだけに何かをしてもらう経験がこの子たちには必要だからです。みんなで食卓につき、できたての温かい食事をいただくことで心の中に育まれるものがあります。仕事や定時制高校で帰りが遅くなる子どもの分は、冷めたものを並べておくことはせず、その都度温かいものを食べられるようにしています。一人ひとりが大切にされている、という想いを持ってほしい。誕生日には名前入りのケーキとその子の好きな料理をみんなで協力して作ります。名前入りのケーキが初めてという子も少なくありません。出かける時には見送り、帰って来る時には迎え、居心地のいい安心できる日常の中で共に暮らしていくことを大切にしています。

ずっと関わり続けること

入居の時、私たちが子どもたちにする約束は、「だれか本当に心から頼ることのできる人を見つけ、私たちを必要としなくなるその日まで、支援をします」ということです。これまでの9年間で59人の子どもたちと暮らしましたが、巣立った子どもたちともずっと関わり続けるようにしています。電話やメールで相談を受けたり、アパートを訪ねたり、生活破たんした子が戻ってきて生活再建をしたり、滞納した家賃や生活費を貸したり、保証人になったりということもあります。DVを受けたり見たりして育った子どもは、出逢ったパートナーとDV関係になってしまうケースも多く、妊娠や出産をしても困難を抱えたり、子育てについてもよく分からない中で、虐待の連鎖に陥りそうな子もいます。注意して連絡をとりながら、ホームの仲間たちと集まる機会を設けたりしています。

ただ、私たちは見守り続けることはできても、専門的な医療支援はできません。虐待や、想像を絶するような辛い経験をした子どもが、バーチャルの世界へ逃れたり、その世界を手に入れるために、他人のお金を盗むことを繰り返す。トラウマを抱えたまま社会に出ていくと、ゲームや薬物、性への依存も多く、性産業に取り込まれていく子どもも後を絶ちません。傷ついた子どもたちが辛い思いをせずに、自分は自分のままでいいんだ、という自己肯定感を持って生きていくために、専門的な支援を受けることができたら、と思います。

子どもたちの持つ喪失感は、埋めようもないほど大きいものです。多くの方たちがこのような子どもたちや自立援助ホームの存在を知り、信頼できる大人として温かい関わりを持って、子どもたちがその喪失感を少しでも埋めることができ、そしていつか自分を愛すること、生まれてきたことを肯定できるようにと願います。

自立援助ホーム「ふじホーム」
（旧ふじえホーム）
メール：fujiejiritu@hb.tp1.jp

東京YWCA板橋センター

喜んで生きる力の源となるように

七夕交流会。子どもたちが作った冠を、高齢者にプレゼント。

PTAの母たちの集まりから始まり、やがて地元の方のご寄付により、1966年、東京YWCA板橋センターは埼玉県境に近い現在の地に産声をあげました。地域密着で、子ども会や子育て支援の小さな活動を脈々と続けた30余年のち、今度は東京YWCAとしてはこれまで殆どなかった行政との連携により、障がい児の療育事業に着手。東京YWCAの別のセンターで行っていた介護事業の拡大と合わせ、新築して様変わりした板橋センターは、社会福祉事業の一拠点として、東京YWCAの中で大きな役割を担うこととなりました。

2歳児の母子通園から100歳を超えるデイサービス利用者まで、毎日多彩な顔ぶれに出会います。事務室に居ながらにして聞こえてくる笑い声、歌声、泣き声、話し声……。発声練習をしている高齢者の皆さんが、職員の掛け声で始めるロングブレスでは、誰よりも長く続けられる男性の張りのある声に、何回聞いても惚れ惚れします。ゲームが盛り上がって利用者と職員のテンションが頂点に達すると、思わず仕事の手を止めて覗きに行きたくなります。「楽しく生きる」ことの意味を体感する瞬間です。

障がい児と高齢者が同じ建物で活動していることは、日常的に交流できるメリットがあり、七夕やハロウィン、節分の豆まきなどの行事や、音楽療法の時間を共有して互いに良い刺激を得ることができます。環境の変化が苦手な子どもたちにとっては、隣の高齢者の部屋への移動もままならないことがありますが、ゆっくりと時間が流れる穏やかな空間の中で、やっと小声で「おじいちゃん！」と声をかけ、職員にたくさん褒めてもらい、ほっと安堵する子どもの表情。それを、いつもの倍ぐらい目を大きくしてほほ笑むお年寄りの温かいまなざし。そうした小さな変化を逃さずとらえた、職員の喜びよう。二重三重に「喜んで生きる」力を共有できる瞬間です。

こうした特別な時間を味わうと、自然と互いに関心を抱くようになり、卒園した子どもが来た折、すーっとデイサービスの部屋へなじみの顔を探しに入っていったり、普段話さないお年寄りが玄関先で「ずいぶん大きくなったね」と声をかける姿が見えたりと、「関心をもって生きる」エネルギーが感じられ、交流を交流に終わらせない意義を痛感しています。

サービスの利用者は、最初はYWCAを知らない方がほとんどですが、こうした一人ひとりをかけがえのない存在として受け止める空気をセンター全体に醸し出しているのが、そこここで見え隠れしながら支えてくださる会員やグループの活動メンバーであり、クリスマスバザーはその集大成でもあります。地域に開かれた活動のつながりから、また地元の方からのご寄付によって、さらに地域に貢献できるような事業を始める準備をしています。

（東京YWCA職員　土岐祥子）

女性がまことに輝く社会へ

実生　律子

一見豊かに見える日本で、2012年、子どもの貧困率が過去最高の16・3％に達し、2013年、子どもの虐待件数は、過去最多の7万3000件を超えた。起きてしまった深刻な事件が報道されるとき、母親の責任が大きく問われるケースが多い。父親はどう関わってきたのか。そこに至った背景が問われることなく、痛ましい事件は後を絶たない。

これには、女性、特にシングルマザーが貧困に追い込まれる問題がある。働いているが貧しく、父親からの養育費も少ない、あるいは皆無で、教育のための支出も極端に制限される。この状況は、子どもへと連鎖していくことになる。一方、祖父母が孫に一人当たり1500万円教育費としてまとめて贈与すれば課税されない「教育資金贈与信託」の額が、すでに5千億円を超えたと報じられている。祖父母の資産による教育格差が拡大することが当然懸念される。123万世帯以上ものシングルマザーの家庭が苦しい生活を余儀なくされる状態の改善なくして、安倍政権の掲げる「女性が輝く社会」の実現などあり得ない。

非正規の雇用格差を解消し、働いているのに貧困という状態をなくすための構造改革が指摘されて久しい。遅々として改善されないのは、「男性は女性より上」「女性は家庭で育児」といった、人権意識の低さが関係しているように思う。それは男性が9割という都議会でのセクハラ発言にも共通している。政策を議論する場でハラスメント的なヤジが飛び交うことは、すべての政治家そして彼らを選んでしまった有権者全体の問題である。来年は統一地方選挙もある。女性を故なく蔑みながら、哀れにもそれに気づいていない候補者を議会に送ることのないよう、日頃から目を光らせていたい。

（東京YWCA会員）

報告 YWCAの夏

世界につながる いのちのチカラ

中高YWCA 全国カンファレンス

地区別に毎年開催している中高YWCAカンファレンス。今年はなんと43年ぶりに、全国規模での開催が実現しました。

「世界につながる　いのちのチカラ」をテーマに、7月31日（木）から8月2日（土）、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターで幕を開いた中高YWCA全国カンファレンス。北海道から九州まで23校、120名の生徒のほか、YWCA部顧問、YWCA関係者など84名が一堂に会しました。

金香百合さん（ホリスティック教育実践研究所所長）は基調講演で、自身のアイデンティティや、家族との格闘を赤裸々に語りました。「過去の辛い状況を今、笑って話せていることに感激しました。毎日、楽しく元気に過ごすため、自分らしく生きるための『エンパワー』を常に意識して生活していきたいと思います」と参加者の感想にあるように、金さんからたくさんの元気をもらいました。

2日目は9つのテーマ別グループに分かれましたが、その中の3つのグループから、参加者の感想を紹介します。

スカイツリーのふもと、東京下町で戦争と平和を考える

東京大空襲当時のことや何が起きたかを聞いて、とても大きな衝撃を受けた。まるこげになった人や大きなやけどを負った人の写真も見せていただきました。話を聞いただけだけど、その状況を想像することができ、集団的自衛権の行使が容認されて、近いうちに日本人が戦争に行くことが当たり前になると思うと心が痛いです。戦争が起こらないような世の中にしたいと思いました。

川崎で出会う在日コリアンの歴史と課題

孫裕久牧師の「平和であるのはその一方で犠牲が伴っているからだ」という言葉がすごく心に残っています。私たちの課題は、その犠牲をなくしていく姿勢を持つことではないでしょうか。“99匹の羊を助けるために1匹を犠牲にするのではなく、その1匹を大切にし”（聖書）、少数派の立場に立つことで、見えてくる景色も違うと思います。

国会議事堂で憲法を学ぶ

沖縄出身の参議院議員、糸数慶子さんから、平和の大切さや、お母さんの沖縄での戦争体験談を聞いて、今もこれからも平和であってほしいと思いました。ワークショップでは、憲法は政府が守らなければならない決まりだと学びました。いま逆に、これを国民が守らないといけない、という憲法改正案が出ています。私は憲法改正には反対です。

また交流会では、YWCAのユースの委員がクイズなどで楽しい時間を演出するとともに、韓国、パレスチナ、インドのYWCAからのビデオレターを上映するなど、世界とのつながりを中高生に伝えました。

カンファレンスを通して、知ること、正しい情報を判断する力、発信していくことの大切さを学んだ参加者たちは、今後「世界につながる　いのちのチカラ」を自分の中で大きく育てていってくれることでしょう。

中高YWCA拡大委員会

原発がなくても生きられる「希望」に出会う

日韓ユース・カンファレンス2014

日韓ユース・カンファレンスは1993年に始まったプログラムで、日韓のユースが寝食を共にしながら両国の社会に共通するテーマについて話し合います。毎年日韓で交互に開催し、今年は日本の番。8月16日(土)～8月18日(月)、広島および瀬戸内海の祝島で充実の2泊3日を過ごしました。

今年の日韓ユース・カンファレンスは、「まだ原発やってるの？～原発が抱える矛盾～」というテーマで広島で幕を開け、37人が参加しました。

まず、原子力発電をめぐる歴史と現状、そして、瀬戸内海に面した山口県・上関町の田ノ浦湾に、中部電力が建設を予定している上関原発建設計画をめぐる状況について、「脱原発へ！中電株主行動の会」代表の溝田一成さんによる基調講演で学びました。

続いて、その開発技術が原子力発電に転用された原子爆弾について知るため、広島・平和記念公園を訪れ、資料館見学と公園内の碑めぐりを行い、豊永恵三郎さんの被爆証言を聞きました。原爆の被害、そして朝鮮人被爆者の存在と状況について深く学んだ私たちは、日本軍の拠点であったかつての「廣島」のこと、韓国を含むアジア諸国への日本の加害についても率直に語り合いました。

さらに、瀬戸内海を渡って山口県・祝島に行きました。祝島では、対岸の上関原発の建設反対運動が32年間続けられています。島では「上関原発を建てさせない祝島島民の会」の清水敏保さんから島の人たちの思いと島の現状を聞くとともに、循環型農業を営む「氏本農園」の氏本長一さんと広島から移住して「こいわい食堂」を始めた芳川太佳子さんから、原発が象徴する大量生産・大量消費ではなく、ゴミを出さず命を大切にする生き方について学びました。祝島を撮影し続けてきた写真家の那須圭子さんの案内で、島で農業を営む80歳の平萬次さんが、おじいさんの代から石を積み、耕し続けて3代かけて築いた棚田を訪れる機会も得ました。「努力すれば達成できる」という平さんの言葉は、日韓のユースにとって、未来への希望でした。

日韓のユースは、原発をめぐる自国の状況について互いにレポートを準備して発表し、「豊かさ」「自分が目指したい社会」についてディスカッションして思いや考えをわかちあいました。プログラムの最後には、日韓のユースからのメッセージを、2羽の鶴が「平和」を考える旅の紙芝居にして発表して幕を閉じました。

日韓ユース・カンファレンス実行委員会

報告 YWCAの夏

ユースのリーダーシップが輝いた、ひろしまを考える旅2014

「ハチロク（8月6日）に雨が降るなんて！」と、広島の人々を驚かせる雨の平和記念式典の翌日から始まった、今年の「ひろしまを考える旅」。1971年、太平洋で多くの国が核実験をし、日本では「核の平和利用」の名目のもとに原発建設が進む中、すべての「核」と命は共存できないという理念をもって、ひろしまを考える旅は始まりました。以来40年以上続けています。幸いにして初日は雨が上がり、そのまま最終日まで持ちこたえてほしいとの期待も虚しく、台風11号というおまけもついて来る状態でした。毎日台風の進路とにらめっこし、最終日に宮島・岩国を訪ねるオプショナルツアーは断念。「雨」が印象づけた旅でしたが、そうした中で中高生の参加者や学生ボランティアリーダー、インターンの活躍が光りました。

今年は、これまでになく多くのユース、特に中学生が大勢参加してくれました。日本の加害の歴史と広島の原爆被害の両面を見る旅として、広島平和記念資料館で観た展示、フィールドワークで訪問した歴史に残る現場、戦争・核兵器・放射能、そして原発についての話、被爆と被曝の証言…。どれを取っても、感受性が豊かで傷つきやすい年齢の中高生にはかなりハードだったはずです。けれども、きちんと心で聴き、心で見て感じ取っていたことが、参加者の感想に表れています。

中高生が怖い思いをしたままだったり、難しくて混乱したままになったりせず、感じたことをさまざまな気づきに繋げられたのは、ひとえにボランティアリーダーとインターンの大学生の働きに負うところが大きいです。初期の検討・企画段階から関わってもらい、共にプログラムをつくり上げ、交流会とワークショップは彼女らが中心となって練り上げ、実施してくれました。分かち合いやワークショップの時間に、中高生が見聞きしたハードな事柄をしっかり共有して消化できたのも、彼女たちの力でしょう。

今年参加されたみなさん、来年もまたどうぞ。まだ参加したことのない方は、来年ぜひ広島で会いましょう。来年は、お楽しみの宮島・岩国ツアーにも行けますように。

ひろしまを考える旅実行委員会

世界YWCA便り

核兵器のない世界へ 高校生平和大使、世界YWCAを訪問

高校生平和大使はこの夏もスイス・ジュネーブを訪れ、核軍縮を求める署名を国連に提出しました。これまで、世界中で100万筆を超える署名を集めています。高校生平和大使は、これまで15年間にわたり、1945年の長崎と広島への原爆投下という人道に対する恐るべき罪について、また現在も続いている原爆被害について報告してきました。そして今年も、日本全国から選ばれた約30人の高校生平和大使が、世界YWCA事務所を訪問し、それぞれの体験と、核兵器のない世界への誓いを共有してくれました。

平和大使たちの中には原爆の被爆3世もおり、祖父母から聞いた話をしてくれました。さらに、2011年の、東京電力福島第一原子力発電所事故による、放射能汚染について、平和大使の一人である石井凛さんは「これまで、原子力発電は少しのウランで火力発電の何百倍もの電気をつくることができ、安全も保証されていると思っていました。でも、原発から放射性物質が漏れてたくさんの場所に広がって、私たちの街のまわりの土壌も汚染されました。原発が爆発したとき、私と兄弟は何も持たずに親戚の家に避難しました」と話しました。続けて本田歩さんが「私は、放射性物質に汚染された町で、不安の中で生きています。原発事故のあと、自宅待機命令が出ました。きれいな水も、十分な食べ物さえない中で、何日もそのままいなければなりませんでした。放射線量さえ教えてもらえませんでした。こんな状態では死んでしまうと思いました」と、語ってくれました。

高校生平和大使は、核軍縮にむけて各国政府に情報を発信し支持を呼びかける活動をしています。世界YWCAは、平和と正義を求めるこのグローバルな運動を、高校生平和大使と連帯して進めます。

世界YWCAウェブサイト英文記事（8月19日掲載）より要約
http://www.worldywca.org/

YWCA－YMCA 合同祈祷週2014

YWCAとYMCAは、毎年11月の第2週目を合同祈祷週とし、1904年以来、祈りの時を持ってきました。今年は11月9日～15日、「変革をもたらす大胆なリーダーシップ」がテーマです。

人生の秋を生きる

寺島　順子（甲府YWCA会員）

長野県と山梨県の県境、ここ長坂に転居して4年目。東日本大震災直後で、自然の脅威と人間の在り方についてさまざまな思いに揺れていた。今、八ケ岳や甲斐駒ヶ岳に囲まれ、風の音を聞き、雲の流れを見ながらの生活は、都会とは全く違ったもので日々新たな発見がある。自然は不思議に満ちていて、「想定外」はいっぱい！

春、郭公（かっこう）ののどかな声と共に農作業が始まる。蕗（ふき）の薹（とう）、土筆（つくし）、蕨（わらび）、屈（ここ）み、藪萱草（やぶかんぞう）、虎杖（いたどり）などなど、地の無償の恵みにあずかる。夏、冷房なしでも樹々を渡る風にホッと一息。向日葵や菊芋の黄色い夏の花の美しさに元気をもらい、夜はクワガタやカブトムシの思わぬ来訪に大喜び、幼子のような気持ちを味わう。

秋、黄金に輝く田んぼは実りを告げ、樹々の紅葉は山を染め、その後、野獣の唸り声のような八ケ岳降ろしと共に、葉は一斉に吹き散らされて冬が来る。自然は美しくも厳しいもの。この冬の記録的な大雪は恐怖だった。人間は、大自然の豊かな恵みに生かされている、小さくて儚（はかな）い被造物に過ぎないことを知らされる。

人間にも四季をあてはめ、その意味を深く洞察したポール・トゥルニエ『人生の四季―発展と成熟』によると、私は今、秋を生きていて「実りと成熟の時、そして冬（死）に向っている」。私は何処から来て、何処へ帰るのか？長い間関わってきた教会やYWCAの活動、「空の鳥を見よ。野の花を見よ」（聖書）と、いと小さきものへの視線を養われ、この息苦しい時代の波に揺さぶられつつも、手をつなぎ、共に生きる仲間がいる幸せ。今日一日を精いっぱい生き、少しずつ「この世につなぐ鎖を外し」（※）、そして永遠の故郷へ「ただいま！」と帰りたいと思う。

※ヘルマン・ホイヴェルス著『人生の秋に』より「最上の業」の詩の一節

種

たとい、
死の陰の谷を歩くことがあっても、
私はわざわいを恐れません。
あなたが私とともにおられますから。
（詩編　23編4節）

英国の大学病院でチャプレンをしていた時のこと。ある日、ガン病棟で、30代後半の女性、トレーシーさんと出会いました。チャプレンが来たことを見て取ると、彼女の顔には、ホッと安心したような表情がみえました。

末期がんであったトレーシーさんは、涙ながらに、家族や可愛がってきた動物への思いなどを話し始めました。自分にとって何がこれまで大切だったのかを振り返りながら、意識化するという作業でもありました。聞き手としての私がそこにいる、ということで彼女は語ることができたと言えます。

訪問を重ねるうち、「地上での目に見える世界」と「永遠に続く目に見えない世界」を結ぶ愛、そしてキリストの愛にある希望も語り合えるようになりました。そこに祈りがありました。祈れることは恵みでした。肉体の命の終わりを考えるとき、私たちは失うものの悲しみだけで胸が一杯になりますが、その向こうにある希望に向かって、私たちは、真剣に祈らされる者となります。

数ヵ月後、彼女の葬儀に参列しました。今は、彼女の家から貰い受けた犬のポチが、多くの人を慰めてくれています。

半田ウィリアムズ郁子
日本基督教団武蔵野教会協力牧師

エンパワーするNGO
YWCA

女性たちのストーリー 第二話

「私が歴史を伝えることにこだわる理由（わけ）」

かたり 宋富子（ソンプジャ）さん

シリーズ「女性たちのストーリー」は、毎回ゲストをお招きして、その生き方・活動へのこだわりにせまる「かたり」のイベントです。2014年は全4回、木曜夜に開催しています。11月3日（第3回）、12月4日（最終回）の詳細は日本YWCA人材養成部会（www.ywca.or.jp 03-3292-6121）まで。

「人と人との出会いは偶然ではなく必然、神様がくださる必然だと考え、天国に入るその日まで出会いを大切にしていきたいです」。在日韓国人二世、1941年に奈良県橿原市の被差別部落に生まれた宋富子さんは、ご自分の73年の人生を振り返り、柔らかな関西ことばで自分史を語り始めました。7人きょうだいの大家族の中で、野山を駆け巡る幼年時代を過ごしますが、学校にあがると「朝鮮人、朝鮮人」と先生や友だちにからかわれ、激しい差別と暴力を受けるようになります。「人を殺すのに刃物はいらない。白い目で十分だ」と語る富子さんは、3年生の頃から何度も死を考え、線路に横たわったり、池に入水自殺を試みたりします。

一番辛かったのは中学2年生の時、先生が豊臣秀吉の朝鮮征伐を教えた時だったそうです。身も心もぼろぼろの小中学校時代を過ごし、卒業後は就職や仕事の差別に苦しみ、20歳で同邦の男性と結婚。しかし、今度は夫の酒乱によるDVに悩まされます。4人の子どもたちには差別の苦しみは経験させたくなかった富子さんでしたが、そんな願いも空しく、学校で残酷ないじめを受けることになります。そして富子さん自身も心身ともにまいってしまいます。

そんな苦労ばかりの人生に大きな転機が訪れたのは31歳の時でした。それは、一番下の男の子を川崎の桜本保育園に入れ、園長先生である李仁夏牧師との運命の出会いを果たした時でした。「自分を愛するように、あなたの隣人を愛せ」という聖書の言葉に触れた時、身体中に電流が走ったそうです。生まれて初めてありのままの自分を受け入れ、自分の本名を名乗り、朝鮮と日本の深い歴史的繋がりを語り、日本人を愛する…。第二の人生がその日から始まったのです。その後42年、富子さんは正しい歴史認識が平和を創るという信念に基づいて「一人芝居」を20年間続け、草の根の力による高麗博物館の設立と発展に全力投球し、現在は文化センター・アリランの副理事長として在日コリアンと近隣住民の交流に貢献されています。最後に富子さんのリードで、出席者全員でアリランを歌いました。平和憲法の理念が踏みにじられつつある危機的状況のなかで、時宜に叶った講演に参加者一同大きな指針と励ましを受けました。

ご協力ありがとうございます

賛助費

乾 康子　遠藤洋子　中橋美鈴
板橋俊子　加藤栄子　川端国世
長 清子　阿部幸子　小貫ツマ
五味優子　田中倍子　浅田和美
江崎啓子　松本彰雄　秋元靖子
長塩滋子　三宅文子　今西浩之
小宮山栄　湊 晶子　遠藤真理
一杉静子　帆足道子　茂木玲子
田崎桂子　大野綾子　原芙左惠
布村耐子　波松 綾　具島美佐子
須藤和子　早田紀子　松村ユカリ
丸田昭江　阿部方子　伊藤いく代
岩崎俊夫　諏訪昭子　富田美樹子
中島潤子　西村律子　三木キン子
松下倶子　三宅純子　田中美紗子
村松幸子　吉田紀子　大田八千代
石渡能子　川西 薫　佐竹芙美子
黒木順子　臼田治子　上村兪巳子
阿武 桂　伊藤眞代　朽木美奈子
山内明子　金剛静慧　岸田善三郎
寺山朝子　古川道子　伊藤富美子
大村直子　岸田晃子　江尻美穂子
比企敦子　谷山幸子　森際眞知子
外崎弘子　宮沢公子　近藤真由美
赤木弘子　河越良子　渡辺寿美子
池上幸子　辻井夏子　谷山久美子
都木恵子　毛利亮子　仁木三智子
吉森美秋　田中蘭子　白木原暁子
小林公代　野呂幸子　井澤須美子
籏眞紀子　鈴木伶子　八重樫照代
西田和子　渡辺園子　仁科謙太郎
永山峰子　芳川雅美　高岩由美子
ギッシュ陽子

ピースメーカーズ募金

実生律子　鶴崎祥子　田中美智子
古川道子　都木恵子　椚美津保
遠藤真理　手島千景　籏眞紀子
渡辺園子　鈴木伶子　長崎YWCA
北星学園女子中学校高等学校
NCC女性委員会（世界祈祷日）

災害時支援募金

臼田治子　古川道子　長岡順子
杉原壽子　鈴木伶子　高岩由美子

オリーブの木キャンペーン募金

黒木順子　臼田治子　桑原貴子
髙崎朗子　阿部幸子　田中美智子
横山正代　遠藤真理　富岡美知子
鈴木伶子　藤田ナツ子　長崎YWCA
NCC女性委員会（世界祈祷日）

東日本大震災被災者支援募金（ピーチリボンキャンペーン）

臼田治子　國安順子　依田良子
岸田晃子　伊藤眞代　古川道子
石川ゆき　赤木弘子　辻井夏子
塩尻和子　今西浩之　上村兪巳子
原芙左惠　早田紀子　田中美智子
乾 康子　阿部方子　伊藤いく代
本山陽子　松下倶子　松村ユカリ
黒木順子　山内明子　近藤真由美
村松幸子　野呂幸子　渡辺寿美子
田中蘭子　板橋幸子　下末かよ子
毛利亮子　阿部幸子　仁木三智子
都木恵子　遠藤真理　富田美樹子
鈴木伶子　こひつじ保育園
東洋英和女学院中高部宗教委員会
東京YWCA 新潟YWCA 長崎YWCA
（2014年6月21日～8月20日現在 敬称略）

発行所 公益財団法人日本YWCA 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121 Fax.03・3292・6122 office-japan@ywca.or.jp www.ywca.or.jp

旬な情報発信しています
メルマガ登録 y-net@ywca.or.jp にお名前を送ってください
フェイスブック www.facebook.com/YWCAJapan

編集発行人 石井摩耶子
偶数月1日発行
定価1部 50円
年間購読料 660円（送料込）
振替 00170-7-23723